
Deadly Sins Game

カモノハシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Deadly Sins Game

【Nコード】

N9885S

【作者名】

カモノハシ

【あらすじ】

平凡な高校生滝沢心羅^{たきざわ しんら}はある日怪しげな露店商からプレスレットをただで貰う。

その代わり七つの大罪である 傲慢 嫉妬 憤怒 怠惰 強欲 暴食 色欲 の七つのチームに分かれ大罪を象徴するアクセサリを奪い合う 「Deadly Sins Game《大罪ゲーム》」に憤怒チーム《サタンチーム》のメンバーとして強制的に参加させられることに

心羅は無事にゲームを勝ち抜き平凡で安全な日常に帰ることができ

るのか？？

第1話 異常との出会い 日常との別れ（前書き）

処女作ですので読んだらできるだけ感想をください。
す。

お願いしま

第1話 異常との出会い 日常との別れ

僕は平凡な高校生1年生だ。

取り柄なんてないし彼女もない、将来の夢もなく変化のないこの日常にも不満を抱かずに生きていた。

あの日までは

あの日僕はいつものように学校に行き退屈な授業を受け帰宅していた。

しかしいつもの帰り道でいつもとは違うものを見つけた。

それはなにやら怪しげな露店だった。

青いビニールシートを広げてその上に7つのアクセサリーが置いてあった。まあ普通だ。

しかし普通じゃないのがそれを売っている男だ。

その男は厚手のコートにマフラーそして手袋をしてそれでも寒そうに震えていた。それもまあ普通だ。

今が7月つまり夏でなければ。

先述した通り僕は平凡な人間だ。それも夜不良がいっぱいいる所に近づくことさえ出来ないほどの小心者だ。

そうでなくともそんな怪しい人間に関わろうと思う人間はいないだろう。

いるとすればそいつは職務質問をしようとした警官か普通の神経をしていないかのどちらかだろう。

にもかかわらず警官でもなく普通の人である僕がそんな怪しい雰囲気纏った男と関わってしまったのはひとえにそこにおいてあったアクセサリーの素晴らしさのせいだった。

もちろん芸術に造詣の深くない僕だがそれでもここにあるアクセサリーはこんな露店で売っていいようなレベルのものではないと感じた。

このアクセサリーが僕の目には国宝級の芸術品と並べても遜色ないと思えるほど美しく映ったのだ。

勇気を振り絞った僕はその男に

「すみません このアクセサリーいくらですか？」

とこわごとと聞くとその男は

「ここにあるアクセサリーにはそれぞれ意味がある。自分の本質にあったものを選べたらタダでやろう。」

と言った。

僕はあまり意味がわからないままアクセサリーの意味を聞こうとするとその男が続けて

「ただしどのアクセサリーにどんな意味があるのかは知らないまま選んでもらう。」

と言うので僕は特に目を惹き付けるブレスレットを選んだ。

「このブレスレットきれいだな この模様はペガサスか？いや羽がないからユニコーンか これにします。」

といって僕は男に見せたすると男は楽しそうに

「あたりだ お前の本質は憤怒だ。」

などと失礼なことを言ったので少しカチンときた僕は、

「僕の本質が憤怒だって？一体なんでそんなことをあんたに決められなきゃいけないんだ。」

と返すと

「そいつはタダだ。その代わりお前はあるゲームに参加して貰う一応言っておくがお前に拒否権はないぞ

滝沢 たきざわ 心羅 しんら。

」

第2話 Deadly Sins Game

「なぜ僕の名前を知っている それにゲームだということだ」

「お前の名前はお前が参加者に指名されたから知っている そしてゲームというのはこのアクセサリーを奪い合う ゲームだ。人間には7つの大罪と呼ばれるものがあるが知っているか？」

「強欲とか傲慢とかだろそれがゲームとどう関係している」

「ゲームとは人間の7つの大罪である 傲慢 嫉妬 憤怒 怠惰

強欲 暴食 色欲 のチームに分かれて お互いのアクセサリーを奪い合うというものだ」

「それで？まあゲームについてはいいとしてなぜ僕に拒否権がないんだ？僕は参加しないしもし参加させられても敵のチームにこのブレスレットを渡すだけでゲームを辞めれるんだろ？やる気のないやつをむりやりやらせてゲームが成り立つのかよ」

「それはいい質問だ しかしその心配は無用だ なぜならゲームの参加者には降りることのできない理由があるからな」

と男が言うので降りられない理由？ なんだそれはと首をひねっている、

「このゲームの参加者は自分の本質に合ったアクセサリーを触った瞬間寿命を半分アクセサリーに吸い取られるんだよ そしてアクセサリーを取られた場合その寿命は失われる。」

というのでなんだ頭がおかしかったのか真面目に付き合っただけ損したと思っていた。顔に出ていたのか男は

「なんだ信じられないって顔だな ふふ まあ無理もない俺も直ぐに信じてもらえるとは思ってはいない これを見る」

と言って男は僕の持っているブレスレットと同じそれを僕の顔の前にかざした。そしてただ一言、

「燃えろ」

するとブレスレットが発火した。

「うわあぁっ」

と僕が情けない声をあげてしまったのも仕方ないだろう。誰がブレスレットが発火すると思うだろうか。しかも顔の前で

男はそんな僕を一瞥して

「今のはこのブレスレットの中にある寿命を使って発火させただけだ お前にもできるやってみろ」

と言われたが寿命を使うというのにできるかと思った。すると

「うじうじうぜーな どうせアクセサリーに吸われた寿命は戻ってこないんだ だったら別に使っても損はねーだろ」

「えっ 寿命が戻ってこないってどういうことだ ならゲームを降りれない理由なんてなくなるだろう？」

「ああ それは自分の寿命は戻ってこないけど奪ったアクセサリーに残ってる敵の寿命は自分の寿命に変えられるんだよ」

「そんなことができるのか？」

「だからそれを信じさせるためにおまえもやれって言ったんだよほれやってみ」

などと言うのでおそろおそろ手をかざして

「燃える」

と言うと同時に心臓にチクツと痛みがはしり握っていたブレスレットが発火した

「痛っ あれでも手は熱くないんだ」

「あたりまえだ お前おれがさつき熱がってるようにみえたのか？ 基本的には自分の炎は自分を焼かねえ ただし過ぎた炎は我が身すら焼く コントロールできない程の炎は自分も焼くから気をつけるあと発火させたときに心臓に痛みがはしったろ それが寿命を使ってるって証拠だよ 使った寿命の量に関わらず痛みは一定だよつと見せてみる」

と言って僕のブレスレットを見ると

「お前が吸われた寿命は40年か 長生きするはずだったんだな」
つられてブレスレットを見るとユニコーンの柄の上に40とあ

た。

「あれっ　けど寿命を使うと減っていくってことは敵のアクセサリを奪ってもあんまり増えないんじゃない　それにもし使いきったらもうどうしようもないし」

「いいところに気がついたな　けどちょっと場所変えようぜ　この格好はさすがに暑い」

「そういえば男はもう震えていなかった。　それどころか気持ちわるいぐらい汗を流していた。」

「暑いならなんであんな格好してたんだよ」

「だってそっちの方が気がひけると思ってたんだよ」と騒ぎながら僕らは歩き出した。

「そっいえば名乗ってなかったな　おれは　轟とんこき　飛鳥あすか　飛鳥って呼んでくれ　俺もお前と同じ憤怒のチームだよ」

「着いたぞ　ここだ」

飛鳥に連れてこられたのは町はずれの倉庫だった。僕は不良が怖くて町はずれなんてろくに歩いたことがなかったので初めて見る場所だった。

「こんなとこで何やるんだよ？」

「何ってさっきの話の続きだろ？」

「いやそうじゃなくて　お前が暑いから場所を変えようって言うから着替えに行くのかと思ってたんだよ」

「それなら大丈夫だ　俺らはここに住んでいる　んでお前も今日からここに住むんだ」

とわけのわからんことを言うので

「はあ！？　僕にホームレスになれっていうのかよ　ふざけんな」

「いやいや　そんなことは言わねーよ　入ればわかる」

と言われしぶしぶ入ると

「うおっ 家の中だ！？ どうして」

「メンバーでがんばって作ったんだよ メンバーは1か所に固まっていたほうがやりやすいんだ だからお前もここに住め 家事は当番制だけど生活費は一切いらぬ 最高だろ」

「秘密基地みたいでいいなここ あっ・・・親に説明どうしよう」
さすがにすぐには納得しないだろうと頭を抱えていると

「その点は問題ない おれがすでに話を通してある」と自慢げに言われた。

「はっ どうやって？」

「なに お前の知り合いを装って泊まりがけで勉強を教えるといったら一発だった。 しっかり着替えとかも貰ってきてもう部屋に運んである」

「うちの親何考えてんの！？ 見ず知らずの人間に息子預けんなよ 絶対将来詐欺にひっかかるよちくしょう」

僕が将来を憂いて涙を流していると飛鳥が結婚式場みたいな扉の前に立って

「まあいいじゃん それより俺たちメンバーを紹介するぜ 1チーム7人編成だから俺をいれて6人だ」

と言ひ扉を開け放った。

「こいつらがお前が所属するチーム 憤怒のチーム 《サタン》のメンバーだ」

開いた扉の奥には5人の人間がいた。そして飛鳥を含めた6人から歓迎された

「~~~~~ようこそサタンへ ようこそDeadly Sins Game《大罪ゲーム》へ~~~~」

第3話 サタン

飛鳥につられて部屋に入るとソファに座っていた茶髪の男に声をかけられた。

「よおしくね しんあ 僕は海老沢 貴 うちのチームは名前で呼び合うようになってうかあ貴って呼んでね」

「わりいな こいつ呂律悪いからラ行発音できないんだわ 俺は藤川 直 職業はヒモ よろしく」

漫画のキャラみたい髪を真っ赤に染めたイケメンが人懐っこそうな笑顔で声を掛けてきた。挨拶を返そうと思っているとそれより先に色白く病人の様な空気を感ぜさせる女性に声をかけられた。

「はじめまして 私 木下 真実と申します。一緒に頑張りましょう。」

「わたしは結城 美咲っていうんだよ」
と真実さんのセリフに若干くいぎみに言ってきたのは中学生くらいの女の子だ。普通としかいいようのない感じの子だった。

「あれっ あと1人はどこにいるんですか？」

と聞くと部屋の隅から聞き覚えのある声がした。

「私の紹介もいるの？ こころは物覚えが悪いなあ全く……」

出来の悪い子供を見るような目をしたショートカットの少女がいた。というか

「なんでお前がここにいるんだよ 愛莉」

僕の双子の妹だった。

「なんでってそりゃあ私がサタンのメンバーだからだよ そんなこともわからないの？」

どうして愛莉がサタンのメンバーかは後で問いただすことにして僕はまず飛鳥にさっきの質問の答えを求めた。

「それで寿命が減ってきたりした場合どうするんだよ」

「ああそれはな「それは私が教えてあげるよ いやー出来の悪い兄を持つと苦勞するな」」

愛莉が嬉しそうに割り込んできた。 いらだつ。

「寿命をアクセサリーから戻すことはできないけどアクセサリーに寿命を追加することはできるんだよ 後は奪ったアクセサリーの寿命は自分の寿命とアクセサリーに追加されるんだよ 例えば敵のアクセサリーに10年寿命が残っていたら自分の寿命に10年 アクセサリーに10年つかされるんだよ」

「つまり敵から奪った寿命は2倍になると考えられるのか」

「そうそう けどアクセサリーに寿命を入れないで自分の寿命を2倍にとかはできないからねあくまで比率は1:1だよ そうそうアクセサリーって言うの長いからこれからは器って言うね 器をとられてもチームのメンバーが取り返してくれたら復帰は可能だよ」

「復帰したとき器に寿命は残ってるのか？」

「うっん また追加しなきゃだめだよ まっペナルティーってやつでしょ」

気がつくと僕と愛莉、飛鳥以外の人はいなかった。

「あれっ 他の人は？」

と僕が聞くと飛鳥が

「ああ お前の歓迎会の為に買い出しにいたり料理作ったりしてるよ」

と言いながら1枚の紙を渡してきた。

「そこに参加チームとチームの特徴とかが書いてある。 覚えておけ」

と言われたので目を通してみる

憤怒のチーム サタン 器の形状、ブレスレット 器による力、火

嫉妬のチームレヴィアタンと同盟 近接戦闘に強い

嫉妬のチーム レヴィアタン 器の形状、指輪 器による力、木
憤怒のチームサタンと同盟 搦め手を使ったトリッキーな戦闘に強
い

傲慢のチーム ルキフェル 器の形状、イヤリング 器による力、
雷 遠距離戦闘に強い

強欲のチーム マンモン 器の形状、ベルト 器による力、水 多
数対1に持ち込んで戦うことが多い

暴食のチーム ベルゼブブ 器の形状、ネックレス 器による力、
肉体強化 色欲のチームアスモデウスと同盟 近接戦闘に強く異常
にタフ

色欲のチームアスモデウス 器の形状 アンクレット 器による力、
操作 暴食のチームベルゼブブと同盟 遠距離から物を飛ばしたり
するのが得意

怠惰のチーム ベルフェゴール 器の形状、チェーン 器による力、
風 こちらから手を出さなければ基本的に戦闘にならないが戦闘最
強のチーム

「この同盟ってなに？ チームごとに戦うんじゃないか？」

「それはですね大罪ゲームには3段階あるんですよ」

「うわっ 真実さんいつの間に！」

「なにやら真剣な顔をされていましたのでどうなさったのかと思っ

てみていたのです」

「ああ そういうことが ところで3段階とは？」

「まず第1ステージでは3チームが全滅するまで戦うのです。しかし闇雲に戦っても消費するだけ なので別のチームと同盟を結び第1ステージに限り協力して戦うのです」

「へえー それじゃあ第2ステージってのは？」

「そいつは残った4チームで場所を限定してリーグ戦をやって上位2チームを出す。 んで出た2チームで一騎討ちを7回やって勝利数の多い方が優勝」

「って直さんいたんですか なんでこのメンバーはみんな急にいなくなったり目の前にいたりするんですか」

「そう興奮すんなよ そんなんじゃここでやっていけねえぜ」

「もうすでに不安ですよ ところで優勝するとどうなるんですか？ 不老不死とか？」

「まっ それは第1ステージが終わってお前が残ってたら教えてやるよ」

「あとなんでチーム名サタンとかベルフェゴールとか一々中2病っぽいんですか？」

「ああ それはしょうがねえよ 7つの大罪を悪魔で表した時の名前だ 初めからチーム名は決まってるんだ あきらめろ」

人物紹介

海老沢 貴 21歳 160?の小柄で肩までの長さのくせ毛で茶髪 滑舌が悪くラ行が あいうえ おになる サタンのメンバー

藤川 直 25歳 180?と大柄だが人懐こい性格でやさしい笑みを浮かべているイケメン 髪は 漫画のキャラのような真っ赤に染めている 職業はヒモでヒモであることを誇っている サタンのメンバー

木下 真実 17歳 158? 着物が似合いそうな雰囲気を持つ背中まで届く黒髪の少女 色白く 病弱に見えるが実際に病気で本来の寿命は過ぎている 大罪ゲームによって生きていくことができたためゲームに誘ってくれた飛鳥に感謝している サタンのメンバー

結城 美咲 13歳 150? よくも悪くも普通 肩までの黒髪 漫画のモブキャラ等と言われて

からかわれると本気でキレル 悪戯が大好きであまり人の言うことを聞かないが飛鳥だけは例外 サタンのメンバー

轟 飛鳥 27歳 185? 短く刈りあげた黒髪と鍛えられた体から威圧感が感じられる ゲーム に 適正がある人間を探しチームのメンバーを補充したりする サタンのメンバーからは例外なく慕われている サタンのリーダー

滝沢 愛莉 16歳 158? 心羅の双子の妹 短くカールした栗色の髪の毛 心羅のことをこころ と呼んでいる
悪戯が好きでサタン内で悪戯があると大抵美咲と愛莉が犯人である
ある 美咲に悪戯のやり方を教えた サタンのサブリーダー

滝沢 心羅 16歳 165? 女のようななよしたような容姿をもちいつも愛莉にからかわれ ている 平凡な人生を平凡と感じながらも幸せに暮らしていた 初対面の相手には敬語だがしばらくすると相手が目上だろぅがタメ口になる

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9885s/>

Deadly Sins Game

2011年6月17日20時40分発行